

ユキとは誰か

——ある少女の日記の分析——

高木亜由美・春日 耕夫

(受付 1997年10月17日)

1. はじめに

「私」というものは自分自身にはわかり難く、自分の弱さ、醜さ、汚さに向きあっていくことは辛いことだ。「私」にこだわりをもち、「私」を知りたかった私たちに与えられた一冊の本、それが『ユキの日記』であった¹⁾。その名の通り、ユキという女性が書き残した日記からなる本である。

無論、ユキと私たちは違う。育ってきた境遇も違う。ものの見え方、感じ方もおそらく違う。私たちは決してユキとの間に自分との共通点を見出したわけではなく、この本に興味をもったのもそのためではない。ただ、ユキの悲しみが、孤独が、そして深い絶望が、私たちの心に響いたのだ。誰にも伝わらなかった彼女の悲しみが、ただ一途に愛されることを求めてそれを得られなかった彼女の孤独が、そして遂には愛されることを諦めてしまった彼女の絶望が、私たちの心を捉えて離さないのだ。そうして私たちは『ユキの日記』の世界に惹かれていった。私たちが『ユキの日記』をとりあげてみようと思った理由はそこにある。

『ユキの日記』は、ユキの死後発見された彼女の日記をもとにして編集されたものである。

編者はユキに、医師と患者として出会う。20歳で「分裂病」を発病した彼女の、最後に主治医となった医師である。このときユキは28歳。しかし、編者とユキの治療上のつきあいは、ごく短いものに終わる。この出会いから数カ月後、彼女がこの世を去ったためである。

彼女の死後、B6判ノートにして60冊にも及ぶ大部の日記が発見される。

1) 笠原嘉編『ユキの日記——病める少女の20年』みすず書房、1978。

ユキ8歳9カ月のときから書き始められ、「分裂病」を発病して一年あまりの後、彼女が21歳になる時点に至るまで、営々と書き続けられた日記である。やがて遺族の援助をえつつこの日記の抜粋がつくられ、10年の歳月を経て『ユキの日記』として出版されることになる。

この本には、「薄幸な彼女のために、また精神医学へのいささかの寄与のために」という、編者とユキの家族の思いが込められている。編者によれば、病人のものする日記は、普通の場合、発病の後からかせいぜい発病直前あたりからのもので、しばしば断片的であったり判読しがたい部分を少なからず含むものが多く、ユキの日記のように、発病という悲劇のクライマックスへといたる長い長い道程を、ほとんど毎日、しかも克明に、かつ冷静に書き綴ったノートはほかに例をみないという。それゆえ、精神医学の専門家にとっても『ユキの日記』から得られるものは少なくないだろう、というのがおそらく編者の考えである。

私たちの関心は、しかしながら、「分裂病患者としてのユキ」にあるわけではない。ただひたすら愛すること、愛されることを求めてそれを得られることなく生き続けなければならなかったユキの孤独が私たちの関心を惹きつけるのだ。なぜユキは、それほどまでに愛されることを求め続けたのか。彼女の深い孤独と悲しみはどこからくるのか。そのような疑問が様々に浮かびあがってくるのだ。

以下、そうした疑問を導きの糸としつつ、『ユキの日記』を私たちに丁寧に読み進めていきたいと思う。

2. 「よい子」ユキ

(1) 日記以前

1936年10月23日²⁾、一男三女のうちの三女、第三子としてユキは生まれ

2) ユキの生年月日に関する記述はないが、1945年10月23日付けの日記にユキが9歳の誕生日を迎えたことが書かれているところから、ユキの誕生は1936年10月23日のことだったと推測できる。

る。編者による解説によれば、上から順に、長女テル、次女マギ、三女ユキ、長男ピートである。4児の年齢間隔はほぼ1年半から2年。

ユキ2歳8カ月のとき、長男ピートが誕生する。第一子のときから「身代わりの男子」の誕生を願っていた母親にとって、ピートの誕生は、大変な喜びだったと思われる。逆に、ユキの誕生というものは、母親にとってはあまり歓迎したくないものであったらしい。次女マギの誕生からわずか1年5カ月後のユキの誕生は生来頑強でなかった母親にとって肉体的負担となったばかりでなく、母親は、上述のように、第一子誕生のときから「身代わりの男子」の誕生を願っていたからである。父親にとってもまた、それは同様であったらしい。そのためか母乳は出ず、ユキは人工栄養で育てられた。しかも、寝かせたままでの授乳が多かったという。他の三人の子どもたちは爪かみ、夜尿、極度の人見知りなどによって母親を困らせたが、ユキだけは何の問題もなく、手のかからない、従順そのものの子どもだったという。

ユキ5歳6カ月のとき母は咯血し、入院。戦時下、4人の子どもは二人ずつ二組に分けられ、親戚をあちらこちらとタライまわしにされる。このときユキはどこへ行ってもききわけよく、骨身を惜しまず働き、よい子としてほめちぎられたという。

小学校生活では勤労奉仕が多く、勉強時間は少なかった。学校はあまり好きではなかったが、姉や姉たちの友だちとは別の、自分の友だちをもって喜んでいったという。

そのころ通っていた教会では、きびしい神父に他の子どもたちはよくたたかれていたのに、ユキだけはたたかれることなく、声を荒げられることすらなかったらしい。だが、ユキは、友人たちが受ける罰にいつも感応していたようにみえたという。

日記のはじまる時点での家族の年齢は、父42歳、母35歳、長女テル12歳、次女マギ10歳、三女ユキ8歳、長男ピート6歳である。

(2) 従順な子ユキ

<1945年10月23日>

今日は私のおたんじょう日です。私がチョコレートをごちそうしました。九月に東京でお父様がもらってきたのを、ほかの人はぜんぶたべてしまいました。今日までずっと私一人がとっていたのでした。みんな私のたんじょう日をまちました。チョコレートがあるからです。ほんのちょっぴりずつわけました。けれどもみんながよろこんでくださったので十ずつたべたようなきがしました。お母様は「このチョコレートはユキが、みんながたべている時たべないでとっといたのです。よくぎせいをしましたね。それからユキ、おめでとう、とてもあまいでした。ごちそうさま」といってくださいました。(ユキ9歳)

「日記以前」のところで述べたように、ユキはききわけよく、従順な子どもであった。そのことが象徴されているようなこの日の日記である。時代は戦後間もなく、チョコレートやお菓子など見ることもさへろくになかった頃のことである。この「ぎせい」は、ユキにとって、とても大きな犠牲であったに違いない。だが、ユキは、そうした「犠牲をすること」をこそ喜びとする子どもだったのである。

<1947年10月5日>

私はお父様やお母様、テルやマギにまで用をしてもらおうと思ってもすぐひかえてしまう。姉ちゃん(お手伝い)にまで、呼ぼうと思うけれどなぜかやめる。そばにいる時は「お母様……」と呼んどいて「まあええわ」といってしまう。一番心がひかえないのはピートです。どうしても自分でするし、苦しい時でも大てい出かけていって自分でします。するとお母様は、「いえばしてあげるのに」といいます。(ユキ10歳)

10歳になる少し前、ユキは喘息の発作を起こす。彼女の最初の喘息発作

であった。その後次第に学校へも行けなくなり、ベッドで寝て過ごすことがほとんどという生活を送ることになる。いつも積極的に犠牲を払っていた彼女だったが、こうなると自己犠牲的に働くことはできなくなる。それどころか、母をはじめとする多くの人の手を煩わせざるをえない存在にさえなってしまう。それでも彼女は、周囲の者の手をできる限り借りまいとする。

このように、ユキが積極的に犠牲を払ったり、誰にも面倒をかけまいとするのはなぜだろうか。そこには、ほめられるような良いことをしたり、叱られるような悪いことをしなかったり、愚痴を言われるような手間をかけなかったりする、よい子であろうとするユキの姿がうかがえる。これらの行為は、もちろん、彼女が自主的に行ったものではあるだろう。しかし、彼女のその行為に、それによって母に認められ、受け入れられることへの期待がひそかにこめられていたとしたら、どうだろうか。よい子でないと受け入れてもらえない、認めてもらえないという不安をユキが無意識のうちに抱いていたとしたら……。

(3) 自分は厄介者なのか

自分自身の存在がどうしようもない無駄なもの、自分は厄介者、とユキは次第に感じるようになる。喘息という持病のため、よい子であろうとする行為を否応なく中止せざるをえなくなったためであろうか。

<1950年1月1日>

どうせ私は生きていてもしかたのない身、だれのためにもならずめいわくな私。だれかわたしを殺しても私はその人をけっしてうらまない！ それよりうらみたい人がたくさんあるわ。でも結局私が悪いのだ。だれよりもお母様の時間を使わないつもりなのに、だれよりも使うとみられ、やっかいなわがまま者とみられ、たまに少しお母様をせかせかせるとひどいことを言われてしまうのだ！（ユキ13歳）

ユキは、誰に迷惑をかけることもせず、積極的に犠牲を払うよい子であった。しかし、病気のため、骨身を惜しまず働くことは不可能になる。そのうえ、自分では決して望まないのに、母の手を煩わせてしまうことにさえなった。そのことがユキは許せず、自分自身に腹立たしさを覚える。しかし、ユキは、それと同時に、本当は自分のために母にもっと時間を使ってほしいと思うゆえの腹立たしさも感じていたはずである。

だが、ユキは、そのことで母を責めることはできない。なぜなら彼女はよい子だったから。だから、彼女は、自分を責めるしかなかったのだ。「でも、結局私が悪いのだ」と。

(4) 「よい子」とは何か

ところで、「よい子」とは、どういう子どものことを言うのだろうか。子どもがよい子であるということは、親から見れば望ましいことであるだろう。だが、子どもの側にしてみれば、よい子と言われるように振る舞うためには、自分自身の欲求をいつも抑えていなくてはならない。その意味で、よい子とは、自分の意思や欲求を抑圧し、まわりの人たちの意思や欲求にしたがって生きることを選んだ子どもの生き方なのである³⁾。とすれば、ユキの生き方もまた、そうした意味でのよい子という生き方だったと言ってよいだろう。

ユキがそのような生き方を選んだのは、もちろん、無意識のうちにてであっただろう。では、なぜユキは、そのような生き方を選んでしまったのか。

ある日の日記に、彼女は次のような詩を書き記している。

<1951年1月8日>

鏡の中のこの私

これは私の顔だけど

3) この部分の記述については以下の文献を参照されたい。春日耕夫『「よい子」という病——登校拒否とその周辺』岩波書店、1997。

どうも“私”ではなさそうだ。

“私”は形がないけれど
ここにうつっている私は
ちゃんとふつうの人の顔。

鏡の中のふたつの眼
これが“心の窓”なのか
“私”はその中にもなさそうだ。

鏡の中のこの私は
鏡がなければ存在しない。
人がいなければ存在しない。

けれどこの“私”は
何もなくても存在する。
“私”自身が消えるまで。

それならこの鏡の中の顔は
“私”でなくて何だろう？
他人なのかしら？

一番大事なことは
“私”はいったい何だろう？
何で形づくられているのだろう？

つまらぬことを考えたもの
つまらぬ言葉を書いたもの

鏡などを見るからさ！ (ユキ14歳)

この詩のなかで，“ ”をつけて表記された“私”と、何もつけられていない「私」とは、明らかに区別されている。“私”のほうは彼女自身の意識であり認識であり、とにかく物思うことにおいて存在している彼女自身。一方の「私」は、鏡に写された彼女の姿。それは、すなわち、母親をはじめとする、周囲の人びとの目に映る彼女の姿である。

鏡に映るこの「私」は「人がいなければ存在しない」と彼女は言う。つまり、この「私」は、周囲に認識されることによって初めて、その存在が成り立つのだ。だが、それは、本来のユキの姿ではない。周囲にユキが見せている姿、言うならば「よい子」としてのユキの姿なのである。

(5) 歓迎されなかったユキの誕生

当然のことながら、ユキは、ありのままの彼女自身が認識されることを望んだはずである。しかし、実際には、ありのままのユキは周囲に認識されないでいた。少なくともユキはそう感じていた、ということは間違いない。

彼女がそう感じる根拠はいろいろあっただろう。が、生まれながらにして自分が歓迎されない存在であったことを彼女自身も感じていたということやうかがわせる日記がある。

<1950年8月17日>

私は時々女に生まれてきたのがしゃくにさわることもあるけれど、ピートみたいな奴ではなくて幸いと思いますねえ。たださ、お母様が私にありがたそうな名前を義理みたいにつけてくれなかったらよかったのに。いっそのこと“きらい”とでもつけたらよかったんだ。私はその方が好きだ。男の子がほしくて、生れたのが女でがっかりして、こんどは義理で(神様があたえてくださったから)わざとありがたそうな名をつけずにふつうの名

前を考えたらよいのに、いやであったことをしょうめいするように、そしてそれをかくすようにさ！ いっそ“いや”という名をつけた方がさっぱりしてるわ、ふうんだ。私は愛の心ではなくて、義理の心にむかえられたからこんな人間に育ったのさ！（ユキ13歳）

編者によれば、ユキの母は子ども時代抜群の学業成績で、父には早くから「男の子であつたら」と言われ、自らも「男なんかに負けるものか」と頑張り、首席を続けたような人であつた。おそらくそのためだつたと言つてよいだろう。彼女は、母となつたとき、「日記以前」のところでも述べたように、「身代わりの男子」の誕生を強く希望したのであつた。ところが、実際には、第一子から第三子まで、引き続き女兒の誕生である。当然、三人目の女兒ユキの誕生は、母にとって、とりわけ期待はずれであり、歓迎したくないものだつたに違いない。

そうして、四人目にしてようやく待望の男児誕生である。母がその子ピートを溺愛したか、ユキの日記から知ることはできない。しかし、自分は母から捨ておかれていたということを、ピートと比較して、ユキは明らかに感じていた。

<1950年7月15日>

ピートは熱がある。何度だか知らないが、お母様はピートに本を読んでやっている。私のずぼんのボタン一つつけることもしないのにピートのめんどろをみている。私が八度の熱がある時も、お母様は私に本を読んでもくれるという親切はしてくれなかつた。たんをはくために頭をもち上げることもなかなかできなかつた時も、そんなご親切はしてくれなかつた。お母様はピートに安静を強いることを“ようしない”。なぜだろう？ フロイドがいうようにお母様が“牝”でピートが“牡”だから？ フフフフ。母親ってそんなつまらぬものかしらん？ もう少しましかと思つたわ。（ユキ13歳）

<1950年5月2日>

ああ憎らしいピート、目をつりあげ、口をつきだした悪魔のようなピート！「ばかやろう」とすぐどなるところはお父様そっくり。お母様は親馬鹿なのか、ピートには一つもけてんがないと思っている。それにしてもしゃくにさわる奴！そしてついには「死ね！」とまでどなる。このごろは「死んでしまって早く天国へ行きたいなあ」と思わなくなってしまった。このまま死んだら天国へ行かれないかもしれないという心配からかもしれない。そして死ぬ時ピートをにくみつづけて死んだら天国へ行けないから、と思ってにくしみの心をおさえようとするが、ピートの顔を見、声をきくたびに胸はたかなりにくしみの感情はつのるばかり。(ユキ13歳)

ピートに対してこのように、怒りや憎しみの感情をもつユキであったが、その感情を外にあらわすことはしなかった。なかばあきらめをもって、その事態を受け入れようとしていたようだ。もともと私は望まれた存在ではない、愛されないのは仕方がないことなのだから、と。

(6) 自分を語らないユキ

ユキは、自分の考えや感情を表に出すことをほとんどしなかった。とにかく「自分」というものを外には出さなかったのだ。しばらく後の日記に、そのことが記されている。

<1953年11月30日>

テルは今まで私と話したことをいつも後悔し、もう話すまいと決心するのだといった。私の方が彼女に何も話さないから、と。「ほんとにユキは何も話さないね」。私は話したい気はあっても、人に何でもないことのようにさえぎられたり、何ていうか、いろんな恐怖があって言わないですます習慣をつけてしまったのだ、と言った。(ユキ17歳)

編者によれば、この家庭のなかでは長女のテルが、ユキのことをいちばんよく理解していたらしい。この日、ユキとテルはめずらしくゆっくりと話しあった。テルが言うように、ユキは自分のことはめったに話さなかった。ユキが「人に何でもないことのようにさえぎられたり」することを嫌ったため、すなわち周囲の人間に自分の領域を侵されることを嫌ったため、ということがあるだろう。ユキ自身がそのことを明瞭に表明していたかどうかはわからないが、母の側からはそのように感じられていたようだ。

『ユキの日記』には、母親の日記や回想、編者による補足説明などがいくつか挿入されている。編者により挿入されたそうした補足説明に、次のようなものがある。——「今までの日記で明らかなように、もっと小さい時ユキはまったく無抵抗であったので母は日常生活での不平不満を思いっきり彼女にぶちまけることができた。ところが彼女のがわにだんだん“抵抗”（それは明らさまな形をとることはほとんどなかったが）が生じ、従って母親の側からいえば“何を考えているのかわからない”人物になっていった。うっかり彼女に話しかけることは彼女の“領域”を侵害することになりそうではばかれた」と。

自分ひとりの世界をもち、誰にも侵されることを望まないかのようにユキは見られていたのだろうか。しかし、ユキが自分を表に出さないということには、それ以上に重大な理由があったと思われる。

<1953年6月14日>

私はほとんど何も話さない。人は私のお、しゃ、べ、り、にまぎれてそれに気づかない。私の口から真実の言葉は出ない。彼らの話していることも、彼らが気づいていないことも共にうつろに灰色に見える。（ユキ16歳）

<1953年8月31日>

私が自分を真心こめて話すと、それに対する他の人の中につくられた批判を怖れる。そのために自分でもいやになるほど神経質になる。私はでき

る限り誤解の余地のないように努める。それでも理解されずとり返しがつかない。自分の言葉を発見すると、私は偽りの中に言い直して、自分に対して自分を逃避させようとする。すなわちその人を自分にとって他人の如き存在にしてしまい、愛されることにあきらめをつけようとする。けっして自分を否定しきることがない。自分に鞭うつこともできない。マゾ的に自己に不利を望むこともできない。(ユキ16歳)

彼女の話すいろいろのことは、それ自体彼女の真実ではない。ありのままの彼女があり、それを覆い隠すようにして彼女の「おしゃべり」があるのだ。その「おしゃべり」にまぎれて、誰も彼女の本当の姿に気づかない。彼女自身も、誰にもそこに触れさせないために、「おしゃべり」によって本当の自分を隠してしまう。

なぜそのようにして、自分を隠す必要があったのか。自分自身の言葉が否定されることは、彼女にとって、存在そのものの否定にもあたることだからではないだろうか。ましてや、それが彼女の真実の言葉であったならなおのこと、である。彼女のありのままの姿が否定されることになるのだから。

彼女が単に自分の領域を侵されることだけを拒んだのなら、他の人につくられた批判をはねかえすこともできたはずだ。「あなたなんかにわかってもらえなくても私は平気で生きていける」と。それは、その批判がそのままありのままのユキの姿の否定にはなりえないからであり、愛されないことにつながるわけではないからである。

自分が何をどのように感じ、考え、言葉にしてそれを発しようとも、ありのままの自分が愛され、受け入れてもらえるという自信を彼女がもつことができているならば、彼女は真実の言葉を発することもできたろう。また、愛されないのが当然であるかのようにあきらめをつけようとすることで、苦しみを回避する必要もなかったはずである。彼女がどのような存在であろうとも常に受け入れてくれると信じられる空間があったならば。そして、彼

女が健全な自尊心をもちえていたならば。

(7) 家族のための“ごみすて場”

この家族にとって、ユキは、どのような存在だったのだろうか。

編者によれば、ユキの母親から編者に宛てて、以下のようなことを記した手紙が届けられたという。——「最近、当時のことを次女マギと話しあった。マギは、『私はあの頃ユキの存在を無視していた。いいえ、無視するというのはあたらない、まるで眼に入らなかった。一軒の家の中で一人の人間の存在が眼に入らないというのは、どういうことなのかしらん？ もちろんそこに存在していることは見えていたはずだが、一人の人間として意識したことはなかったような気がする』』といった。その点では母も同じであった。むしろ、母がそうだったからこそ家中がそのようにしかユキを意識しなかったのであろう。よその人にむかって母は『ユキこそわが家の天使』と吹聴していた。その言葉の底にあるものを他人から指摘されたら必死で否定したにちがいない。しかし心の奥深いところでは、ユキが家中の“ごみすて場”になっていくことを何となく感じてそのような表現をしていたのではないかと。

また、ユキの姉（特に記述はないが、おそらく長女テルだと思われる）は母に宛てた手紙のなかで、次のように語っている。「ユキについてはどうも具体的には思い出せないのですが、私自身ユキに対して『すまなかった』という気持ちが強くて……というのは、ユキに“傷つけられた”という記憶はなく、“傷つけた”ことばかり思い出すのです。当時“故意”であったかといえば、それはお母様の手紙にあったように、弱者のところに不満のはけ口をもとめたということと、それから何か弱い者いじめの快感の対象にユキをしていたように思います。いっしょうけんめいに思い出してみるのだけれど、あの食堂で夜遅くまで彼女と向かいあって、私は“彼”のことをペチャクチャ吐き出したり、父母の悪口を言っていたのかもしれませんが。思い出す情景は、ユキはいつも聞き役で、お茶ばかりのんでいました。彼

女が何かの理由で“よいきき手”になってくれなくてむっつりしていると、私は彼女をなじったかもしれないと思います」と。

ユキは、母や姉からたれ流される愚痴の、聞き役だったのである。母親は彼女の世話を焼く反面、彼女に向かって、あたかも「ごみ捨て場」にごみを投げ捨てるように、自分のなかにたまった愚痴を吐き出していく。そのようにして家中が彼女を「ごみ箱」にすることで、家のなかは不思議に清浄な状態が保たれる。母親にとってユキが「わが家の天使」であった本当の理由は、編者が補足説明のなかで示唆していたように、そこにあったと言ってよいだろう。

ごみ箱がなければごみは掃き清められることがなく、家のなかには不浄な空気が満ちてくる。家中のそうした不浄なるものを一身に引き受け、自らが「ごみ箱」になることによって家中を清めていく「天使」。ユキがそのような存在であるためには、彼女は、一人の人間であることを禁じられる。自分の意思や欲求をもつ存在として家族の前に立つことを禁じられるのだ。彼女が一人の人間であるならば、彼女自身の意思や欲求のゆえに、それらの愚痴や不平不満に対する反抗が生まれてくるはずだから。だが、周囲はそれを許さない。

家族のなかでユキが一人の人間として意識されることがなかったのも、当然のことだったのかもしれない。一人の人間として何かを思い、感じ、考える存在としてユキをとらえることは、家族にとっては完全なる「よい聞き手」としてのユキを失うことになるのだから。悲しいことは、ユキ自身そのことを知りながらも、望まれるまま、「よい聞き手」に徹していたことである。

(8) “私” でいてはならないのか

このようにして、ユキは、一人の「人間」としてありのままにあることを禁じられて生きていた。まわりは彼女によい子であることを求めたのだ。ユキ自身もまた、自分がよい子であろうとなかろうと、自分が自分である

限り愛され受け入れてもらえるという自尊心をもつことができなかつた。だからこそ、ユキは、自分が自分であることが許されることを強く強く熱望したのではないだろうか。

<1953年5月16日>

音楽はどんな環境にあっても私にとって天国であり続けるだろう。天国とは、この世の苦しみ悲哀を忘れさせるからではない。ここでいうのは、私が自分をどんなに悪く思うようになろうとも、また自分の才能に、個性に絶望しようとも（歳月が私にそうさせるだろうから）音楽が私に求めるのはそんなものではないからだ。音楽は私に幸福であれとも不幸であれとも求めない。私がただ音楽に耳を傾けるだけの心の素直さと感受性とをもちておりさえすれば、その時の私の渴きをうるおしてくれることができる。音楽が私に要求するのは私そのものなのだ。（ユキ16歳）

ユキは、自分が自分であることを許してくれる音楽の世界をこよなく愛する。音楽をきくためにはユキはユキでなくてはならないのだ。ユキが幸福であっても不幸であっても変わりなく、音楽はユキを受け入れてくれる。ユキがまさしくユキであること、そのことだけを音楽はユキに要求し、そのことをこそ要求する。ユキが望んだのはそのような、ユキがありのままのユキ自身のままであることを許してくれる「他者」だったのだ。そのようにして母に愛されること、家族に愛されることをユキは望んでいたはずである。

(9) ユキを支配する母

ユキの母は、実によくユキの世話を焼いていた。しかし、母に世話を焼かれながらも、その裏にあるものが愛情ではないことをユキは鋭く見抜いていた。

<1955年 (日付なし)>

ママは私の世話をやく。優しい声音で私を左右しようとする。私は私の自由が縛られ小さくなると感じる……。はだしでいることも、しばらくの間上着なしでいることも、今一階にいることも、朝少し早く起きることも……みな許されない。これらはお母様を心配させるというのだ。ママはこうした世話の範囲を広げる。以前は冷たい言葉でいらいらといいつけたことを、こうした細かさで優しい声音で言うのだから、それにいらだつのは私ぐらいなもの。お、まったく! 「これを愛だと思っているのだ、自分からの犠牲も忍耐もいらない、人に従わせる愛?」という考えが私を苦しめるのだ。(ユキ18歳)

また、編者によって挿入されたユキの母の日記にも、次のようなものがある。

「朝目がさめるととなりでユキがひゅうひゅういっている。『今日は教会へいかないかもしれない、しんどいから』とユキが呟いたのに対して私は『やめときな』とほんやり答える。そしたら『いらんこといわんといて。ただ、ふん、ていえばいいのに』と。私ははっとして胸をつかれる。そうだ、これなのだ。私はながいあいだ“ユキをいたわる”という自分の気持ちの犠牲としてユキを自分の思いどおりにさせようと試みてきたのだ。」

母がユキに対して強制する様々なことは、もちろん、喘息をもつユキの身体を気づかっただけの思いやりゆえのものであっただろう。しかしそれだけではないことをユキは感じていた。後になって母も、そのことに薄々と気づきはじめる。母はユキの意思を尊重せず、少しでも彼女のしたいようにはさせない。たとえば、少しの間はだしでいることも、上着なしでいることも。だから、母の行為がユキへの愛ゆえにではなく、親の責任ゆえに、であることをユキははっきりと感じていた。それが「愛」という装いをした

「管理」でしかないということも。

しかし、ユキには、それに抗するだけの力はなかった。そのようにして母に束縛され、自分自身の意思をもつことを禁じられつつも、彼女の存在そのものがその母に依存していることもまた事実だったから。母が目の前から去ることは、彼女にとっては恐怖であった。それは、自分の存在が母の手に委ねられていると思わざるをえなくなるほど弱々しい、彼女の身体のせいだったかもしれない。そのことをわかっているからこそ、ユキは、不満を覚えつつも、母に反抗できないでいたのだろう。

(10) ジグソーパズルの1ピース

無意識のうちに、ユキは自分自身を封じ込めていた。自己の欲求を心のすみっこのほうに押しやり、母や周囲の人びとが望むようになっていった。その反面で、彼女は、自分自身をありのままに受け入れてもらいたいと熱望した。しかし、自分が自分であることを許してくれるのは音楽だけであった。他の人たちとともにあるとき、ユキは自分のままでいることができなかった。だからユキは人びとのなかで居心地悪く感じてしまうのであった。

<1955年（日付なし）>

私たちは“ふるまい”を身に着る。役者のように上手下手がある。私はだんだん楽しそうに人と話すのがむずかしくなり、人びとのなかで居心地がよくない。なすべきことを知らない役者。（ユキ18歳）

他の人たちとともにいるとき、人は誰でも、多かれ少なかれ“ふるまい”を身に着なければならない。にもかかわらず、ユキは、そのことを居心地悪く感じてしまう。“ふるまい”を身に着ることは、ユキにとって、自分自身を封じ込めることを意味したから。

ジグソーパズルの1ピースは、おさまるべき場所がはじめから定められている。その形のもののしか、その場所にははまらない。それと同じように、

自分をその形に近づけていかねばならぬと考えるユキがいる。しかし本当は、自分がどんな形であろうとも受け入れてもらえることをユキは望んだはずである。決められた形のジグソーパズルの1ピースになることではなく(つまり、周囲の人たちが望むとおりの姿になることではなく)、ありのままの自分であり続けることを。だからユキは“ふるまい”を身に着ることが下手になる。彼女は「なすべきことを知らない役者」のような存在となる。しかし、それでもユキは“ふるまい”を身に着ることをやめようとはしない。自分が見捨てられた存在であることが決定的になることを避けるために。

(11) 「よい子」でなくては捨てられる？

<1954年(日付なし)>

人のためにいろいろとするからこんなに失望するのだ……。その上悪くいわれて! どんなに誠実に働いてもかえって何もしないより悪い……。そんなに“棄てられて”どんなに哀しいか! (ユキ17歳)

ユキが犠牲を払い、誠実に働くことは、この家族のなかでは当然のことのように受け止められていたのだろう。幼いころからユキが犠牲を払ってきたからである。では、なぜユキは、そのようにして犠牲を払わなければならなかったのか。「棄てられて」いることをユキが無意識に感じとっていたからではないだろうか。

棄てられないためには、母や家族にとって役立つ存在でいなければならない。そうしている間は家族のなかで自分の居場所を確保できるから。たとえそれが家族のみんなから都合よく使われているだけのことでしかなかったとしても。

しかしながら、人のためにいろいろとすれば、そのことゆえに非難を招く結果にもなる。だが、ユキは、そのことによって失望させられたとしても、誠実に働くことをやめるわけにはいかなかった。自分が本当に捨てら

れてしまわないためには。

しかし、そのように自分の欲求を捨て、よい子になっていなければならなかったのなら、自分の存在がすでに見捨てられたものであることをユキは知っていたということになりはしないだろうか。

(12) 自己をもたないユキ

期待を裏切られたとき、人は失望する。その失望は苦しみや悲しみをもたらす。だから失望しないで済ませたいと人は思う。

失望しないためにはどうすればよいか。ひとつは、期待や望みがすべてかなえられること。もうひとつは、はじめから何も望まなければよいのである。

<1953年9月16日>

幼い頃の私の思い出の中で喜びに染められたものはほとんどない。クリスマスプレゼントでさえ私にとっては喜びである以上におどろきであった。喜び、それは期待や望みがみたされた時、ことに強く感じるものだ。しかし私はほとんど何も自らあえて望まないほどに外界によって抑圧されていた。だから私は人を羨むこともなかった。すなわち私は自己を持たなかった。(ユキ16歳)

<1953年11月25日>

クリスマスに何が欲しい？ ときかかれても私は何一つ思い浮かばない。それは私の生活が豊かだからではなく、単調な生活にあまりにも適応してしまった私の希望のなさによるだろう。この、何もあえて望まないということによって、消極的に私は苦しみを避け得てあまり不幸でなくなったのかもしれない。(ユキ17歳)

ユキはまったくの最初から何も望まなかったわけではない。何かを期待

するたびに裏切られ、その度に失望を味わうという経験を重ねるなかで、失望しないためには何も望まなければよいのだということをユキは学んでしまったのだ。

人が自分の意思をもち、様々な欲望を抱くのは当然のことである。だが、欲望をもつたびに失望させられるという経験を重ねれば、欲望をもった瞬間に無意識のうちにそれを否定し、やがては何の欲望ももたなくなる。あるいは、また、自分が望んだことではなく、他人が自分に望んだことを自分が望んだことのように感じてしまう。それが、すなわち、ユキの言う、「自己を持たない」ということなのだ。

自分がそのような自己をもたない存在であることを、その人自身が自覚しない場合もあるだろう。むしろ、そのような場合が多いとさえ言うべきだろう。しかしユキは、自分がそのような存在であることを認めており、「それをお母様がどんなに助成したか」も知っているのだ。

「何もあえて望まないことによってあまり不幸でなくなった」とユキは言う。しかし、彼女は、不幸でなくなったのではない。不幸を意識しなくなっただけのことなのだ。

現在の自分に満足していると思ひ込むことや、自分の望むものが与えられないのは当然だと思ひ込むことによって、自分の不幸を意識しないことができるだろう。だが、ユキの不幸は、そのことによって、一層ねじれたものになっていったはずである。なぜなら、そのようにして自分の不幸を感じまいとすること自体がすでに、「自己を持つまい」とすることにつながっているのだから。

3. 愛されたいユキの孤独

常に自己の欲求を抑圧しているユキ。そのことを自分で知りながら、彼女は自己抑圧を続けるのである。それは無意識であって無意識ではない。期待が絶望に変わることを回避するために、ユキが選んだ道なのである。それは、また、積極的に犠牲を払うことによって自らの存在を周囲に認めさ

せようとする努力でもあった。

どちらにせよ、ユキは、自ら何も望まないほどに自己を抑圧することによって周囲に自分を認めさせようとした。そのことによって、彼女は、愛を得ようとしたのだ。そこに、彼女自身の言う、「自己を持たない」ユキが生まれる。

なぜ、彼女は、自分の欲求を抑圧しなければならなかったのか。彼女が自分を望ましくない存在、捨てられた存在と感じたからである。なぜ、彼女は、自分を望ましくない、捨てられた存在と感じたのか。彼女がありのままの自分を愛されなかったからである。少なくとも、彼女には、ありのままの自分を愛された記憶というものがなかったのだ。

それでは、なぜ、彼女は、愛された記憶をもつことができなかったのか。

(1) 母の愛と父の愛

エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) は彼の著書『愛すること』のなかで、「父の愛」と対比させつつ、「母の愛」について次のように述べている。「母親の愛の真の姿は無条件的であることである。母親が新しく生まれた子供を愛するのは、その子供が特別な条件を満たしたからとか、あるいは、なにか特別な期待に応じた行動をしたからというような理由からではない。母親はそれが自分の子供であるという理由で愛しているのである」と⁴⁾。

4) E・フロム『愛すること』懸田克躬訳、紀伊国屋書店、1959、56頁。なお、ここで「父」「母」と言われているものは、決して、実体としての「父親」や「母親」を意味しているわけではない。また、「父の愛」「母の愛」と言われているものも、実体としての「父親の」愛や「母親の」愛を意味しているわけではない。それが意味しているのはあくまでも〈父性的〉愛や〈母性的〉愛なのである。この点について、フロムは以下のように述べている。「ここで私が父の愛とか母の愛とかを語る時には《理想的な型》——マックス・ウェーバー的の意味において、あるいはユングの意味における原型——について語っているのであり、あらゆる母親とあらゆる父親がこのような仕方であっているということを意味しているのではない。私が述べているのは、母親のような人、父親のような人において示されている、母性的原則及び父性的原則についてなのである」と。フロム、同上、56-57頁。

要するに、ありのままにある彼、あるいは彼女をありのままに愛する「無条件的な愛」、それが「母の愛」だということである。

それに対して「父の愛」は「条件付きの愛」である。フロムは次のように言う。「その原則は『おまえが私の期待を満たしていたから、おまえの義務を果たしているから、私に似ているから、私はおまえを愛するのだ』ということである」と⁵⁾。要するに、「父親」が示す条件を満たしたからという理由で与えられる「愛」、それが「父の愛」だということである。たとえば、テストでいい点をとったから、試験に合格したから、などといった理由で与えられる「愛」、それが「父の愛」なのである。

「母の愛」にも「父の愛」にも、積極的な面と消極的な面があるとフロムは言う。

まず、「母の愛」について。

「母の愛」は「無条件的な愛」だから、「絶対的」なものである。おまえがどんなことをしようとも、どんな子どもになろうとも、おまえがおまえであるかぎり、私はおまえを愛するだろう、というのが「母の愛」だから、たとえテストで悪い点をとろうとも、人を傷つけるような愚かな行為をしようとも、それが失われることはないのである。それゆえ、「母の愛」を与えられる幸運に恵まれた子どもは幸せである。自分が愛されているということを、絶対的な安心感をもって確信できるのだから。これが「母の愛」の「積極的な面」だとフロムは言う。

しかし、これは、裏返せば、そのまま「母の愛」の「消極的な面」になる。なぜなら、「無条件に」与えられるのが「母の愛」であるということは、裏返せば、「母の愛」は、どんな犠牲を払っても、どんなに努力しようとも、かちとることは不可能だということになるからである。それゆえ、はじめから「母の愛」を与えられなかった子どもは不幸である。どんな努力を重ねても、どんな犠牲を払っても、「母」がその子どもを愛そうという気にな

5) 同上, 58頁。

らないかぎり、永遠に「母の愛」は得られないのだからである。これが「母の愛」の「消極的な」面だとフロムは言い、次のように述べている。「母の愛の無条件的な性質にはやはりネガティブな面もある。それは（中略）獲得されず、作られず、統制もできないものである」と⁶⁾。

これに対して、「父の愛」は、かちとることができるものである。それは「条件付きの愛」だから、求められる条件を満たしさえすれば与えられるのだ。つまり、「父の愛」を得たいと思うなら、求められる条件を満たしさえすればよいのである。このことをフロムは「父の愛」の「積極的な」面と言い、次のように述べている。「父の愛は条件づけられているので、私がそれを獲得するためには何かをすることができる。（中略）父の愛は母の愛ほどには統御できないものではないのである」と⁷⁾。

しかし、これもまた、裏返せば、そのまま「父の愛」の「消極的な」面となる。なぜなら、求められる条件を満たしさえすれば与えられるのが「父の愛」だということは、裏返せば、その条件を満たすことができなければ、その瞬間に、「父の愛」は失われてしまうことになるからである。つまり、「父の愛」というものは、いったんそれをかちとることができたとしても、それがいつまでも続くという保証はないのである。それゆえ、自分は絶対的に愛されているのだという安心感はそこには決してないのである。それどころか、求められている条件をいつ満たすことができなくなり、その愛をいつ失わなければならないかわからないという不安と恐怖を常に抱かせるのが「父の愛」なのだ。それゆえに、人は、フロムが言うように、決して失われることのない「母の愛」を熱望し、それに執着するのである。

このように考えてくると、はじめから「母の愛」を与えられなかった子どもの不幸は計り知れない。なぜなら、どんな犠牲を払っても、どんなに忍耐強い努力を重ねても、現実にかちとることができるのはあくまでも「かちとることのできる」愛、すなわち「父の愛」でしかないのであって、「母

6) 同上，54頁。

7) 同上，59頁。

の愛」を得ることは永遠にできないのだからである。

それでは、ユキの場合はどうだったのか。

彼女は自分の欲求を抑圧し、犠牲を払うことで愛を得ようとした。なぜ彼女はそうしなければならなかったのか。彼女が「母の愛」を与えられなかったからであるに違いない。それゆえに彼女は愛を得たいと思い、それゆえに「愛されえる存在」になる道を選んだのだ。そうして得られるのがたとえ「父の愛」でしかなかったとしても、愛されたいと思うならそうするよりほかはない。そうすれば、まがりなりにも「愛」を与えられるのだから。

よい子と言われるような存在になることによって、ユキは、まがりなりにも愛された。自分は絶対的に愛されているという安心感は得られなかったとしても、愛されたいという欲望を満たすにはそうするよりほかなかったのだ。しかし、そのことでさらに自分が苦しまなければならなくなるということに、ユキは気づいていたのだろうか。

(2) 愛されるに足る“付加価値”

<1952年4月3日>

私も自分の中に虚栄心を少なからずみつける。しかし私はそれが私の心のすべてだとはけっして思わない。それよりも大きな望み、それは愛されたいと思う心だ。愛されたいと思うことが虚栄心なのではなくて、愛されたいと思うことの結果として虚栄心がおこるのだとこそ私は思う。不条理なことながら、もしみにくい“私”，無名の“私”を人が愛し、敬愛してくれるとしたら人はそれに満足して虚栄心など出てこないのではないか、少なくとも私にとってはそうだ。(ユキ15歳)

ユキがありのままのユキ自身のままで認められ、愛されていたのなら、あるいは、少なくともユキがそう感じることでできていたならば、愛されたいと思うことの結果として、ユキの言う「虚栄心」が起こることはないは

ずである。なぜなら、自分をまわりによく見せようとするのはなぜかといえば、ありのままの彼女が愛されなかったからこそ、なのだから。まさしく、ユキが言うように、虚栄心というものは、愛されていないがゆえに愛されたいと思うところから起こってくるのだ。ちょうど、ありのままの自分が愛されていないとき、愛されたいと思うがゆえによい子として振る舞おうとすることと同じに。

<1953年4月2日>

私は高慢ではない。私は排他的ではない。私は思いやりも持っている。心づかいもする。私は人を愛する。私は自分を犠牲にすることもできる。私は強い意志も持っているし、それにもかかわらず柔らかな心を持っている。私は……ね？ 私は私なりの長所を持っている。ああ、神様、このように長所を否定するわけでもないのに、どうして自己嫌悪にかられるのだろうか？ これらの長所にもかかわらず、私が他の人の目に止るのは、私の知識であり考えであって、私の重要視しないものでしかないというそのことのためなのだろうか？（ユキ16歳）

ユキは、自分が愛されるに値する長所を充分にもっていることを否定しない。それにもかかわらずユキが自己嫌悪を覚えるのは、自分が「よい子」という付加価値を負った存在であるがゆえに周囲に認められているのだという思いを拭い去れないからである。ここで、ユキは、並べたてた自分の長所と、彼女の知識や考えなど、彼女が重要視しないものとを分けている。しかし、彼女が自己嫌悪を覚えるのは、その長所のゆえに愛されるということもまた彼女自身が愛されることにはあたらないということに、彼女が気づいていたからではないだろうか。すなわち、愛されるに値するのは私の長所であって、私自身ではない、ということに。そしてまた、自分の長所をあれこれと並べ立てること自体、何ももたないままでも自分は愛されているという確信をもてないからだということに、彼女が気づいていたか

らではないだろうか。

ユキが並べ立てる長所もまた、その意味で、彼女が重要視しないものと同等のものだったのではないだろうか。誇るべき長所をもつがゆえに愛される資格があると言えは言うほど、長所がない自分は愛されないということにつながってしまうのだから。

(3) “付加価値”でも愛されたい

<1954年3月22日>

毎日お母さまはピートの英語の勉強をみてやっている。こんど数学も先生につくことになった。どんなに私自身“賢い”ことなどとうとばなくても……もし私が賢くなかったら、今頃はもっと見棄てられ、もっとみじめな思いを感じていなければならないだろう。うちの人たちは賢さをとうとぶから。こうして教育もないのに一人前の顔がしていただけるのも“賢い”からだ！ (ユキ17歳)

ユキ自身は、賢いことに何の価値も見出そうとはしない。賢いことによって愛されることがユキそのものが愛されることにはならないことをユキは知っているからだ。しかし、愛を求めてやまないユキは、自分が重要視していない知識や考えなどの付加価値によって愛されることもまた、無意識のうちに望んでしまう。

<1956年4月2日>

帰りに電車のなかでYさんが、ユキはすばらしいですね！ どこであれだけ勉強されたのでしょうか？ ほくなどはとても……と言っていたという。私がおそだと言ってもお父様はまちがいないといいはりまじめだった。讃辞が心にとってどんなに快いか！ はじめて経験した。私に虚栄心がほとんどないというのはまちがいで、ただ自信がないだけなのかもしれない。みな急が急に親しみをもてた。みなも私に親しんでくれた。みな非常にいい人

ばかり。この人たちを傷つけまい。(ユキ19歳)

復活祭を教会ですごし、討論会で思いがけなく主役を演じた翌日に書かれた日記である。ユキに対しての讃辞というのがユキの何に対する讃辞かはよく分からない。しかし、少なくとも、ユキという存在そのものというよりも、ユキが身につけた何らかの価値に対する賛辞であったことは間違いない。しかし、ユキは、讃辞を受けるという経験、すなわち自分のことが認められるという経験に大きな喜びを感じたばかりか、ほのかな自信さえも覚えていたようだ。

ありのままの自分を認められたい、愛されたいと思うことと、自分の身につけた何らかの価値を認められることが大きな喜びになることは、矛盾しているようにも見える。しかし、そのふたつの気持ちがユキのなかに同時に発生するということは、何の不思議もないことである。なぜなら、それらはすべて、生まれる原因を同じくしているからである。それは、すなわち、「愛されたい」という願望なのである。

(4) “愛されたい－愛されない” サイクル

人は、「自分は誰かに愛されている」という確信をもちえないとき、「愛されたい」という願望を強く強くもつようになる。それゆえに、人は、愛をかちとろうとして、周囲から認められる存在になろうとする。そうして人は自分で自分を抑圧し、「よい子」でいようとするのである。しかし、そのことによって周囲から自分の存在を認められ、「愛」をかちとることができたとしても、その「愛」はあくまでも「よい子」としての自分に対する「愛」でしかなく、ありのままにある自分が愛されたことにはならないのだ。だから、ありのままの自分を無条件に愛されたい、自分が自分であるゆえに愛されたい、と思う気持ちは満たされることなく、「愛されたい」という願望はますます募ってゆくことになる。こうして、「自分は確かに愛されている」という確信をもちえないところから始まった「愛されたい」という願

望は、終わりのないサイクルを創り出してゆく。

図式的に表現すれば、そのサイクルは次のように展開する。

ありのままの自分を愛されない。

↓

自分の存在を認められない。

自分の居場所、存在価値が見出せない。

↓

積極的な犠牲を自らに強いる、自ら何も望まないほど自己の欲求を抑圧する、何らかの価値を身に帯びる、などすることにより、「よい子」として生きる。

↓

「よい子」としての自分が愛される。

「よい子」としての自分の存在が認められる。

「よい子」としての自分の居場所を確保できる。

↓

「よい子」という自分の居場所しかない。

「よい子」という自分しか存在を認められない。

「よい子」でなければ愛されない。

↓

ありのままの自分は愛されていない

自分自身の欲求を抑圧し、「よい子」になることによって周囲の人びとの「愛」を得ようとする行為は、たとえそれに成功したとしても、真に求める「無条件的な愛」への渴望をより強く自覚させる結果に終わる。その渴望のゆえに、「愛されたい」という欲望はさらに強まり、愛をかちとろうとしてさらに一層努力を重ねなければならないことになる。しかし、その努力がもたらすのは、結局のところ、ありのままの自分は愛されてはいないとい

うことの確認でしかなく、それゆえに、「無条件的な愛」に対する渴望はさらに強くなっていく。

こうして、「自分は確かに愛されている」という確信をもつことができなるところから始まったこのサイクルは、愛をかちとろうとする努力を経て、結局は、ありのままの自分は愛されてはいないんだということの確認で終わる。それは、結局、ふり出しに戻るだけのことなのである。このサイクルは、それゆえに、無限の循環を繰り返すことになる。

このサイクルを“愛されたい-愛されない”サイクルと呼んでみよう。

ユキもまた、行きつ戻りつしながら、矛盾する自分の姿に苦しみ、抜け出すことのできない“愛されたい-愛されない”サイクルに陥るのである。

ユキは、いつかはそれが失われるのではないかといった恐れや不安を絶対にもつ必要のない、無条件的な「母の愛」を与えられなかった。それゆえに、ユキは、努力によって得ることのできる「父の愛」を獲得するしかなかった。しかし、いつ失われるかもわからない「父の愛」が与えてくれる一時的な承認と「愛」では、絶対的な安心感にはなりえない。だから、ユキは、ありのままの自分のままで愛されることをさらに強く望んだのだ。

自らの愛されるべき長所を並べたて、「私はこんなにもいい所をたくさんもっている、だから愛されるに充分値する人間だ」と思い込もうとしたところで、ユキ自身が愛されているという確信にはつながらない。自分は愛されていると一時的に思うことができたとしても、結局は、「私のもついい所が愛されているにすぎないのだ」ということに、すぐに気づいてしまう。「いい所を失えば私は愛されなくなる、見捨てられてしまう」ということがわかってしまうのだ。

「賢い」ということになど、ユキ自身は何の価値も見出さないとしても、賢くあらねば「見捨てられる存在」になってしまう。そうはならないために、ユキは賢くあろうとする。賢ければ、まがりなりにも愛を与えられる。しかし、だからといって、ありのままの自分が愛されることには絶対にならない。こうしてユキは、“愛されたい-愛されない”サイクルのなかで孤

独の苦痛に喘ぎながら、自分自身を抑圧し続けていく。

(5) “愛されたい-愛されない” サイクルの落とし穴

ありのままの自分を愛されたいと願うがゆえにユキは自分自身の欲求を抑圧し、周囲が彼女に望むことをもともと彼女自身が望んでいたことであつたかのようにすりかえていた。それでもなお、ありのままの自分は愛されないという淋しさや、家中の「ごみすて場」にされる不満を決して外には表さず、克明に日記に綴るのみであった。

なぜ、彼女は、誰にも本当の心を隠していたのだろうか。それは、本当の自分を周囲に見せることによって自分がさらに見捨てられるということが無意識のうちに恐れていたからではなかったか。

“愛されたい-愛されない” サイクルのもつ最大の落とし穴はここにある。「母の愛」のもとに愛される存在でありたいという願望、つまり、ありのままの自分を愛されたいという願望からこのサイクルは始まるにもかかわらず、そのサイクルが始まった瞬間に、「ありのままにある自分」というものの姿は見えなくなってしまうのだ。

ありのままの本当の自分を愛されたいのなら、ありのままの本当の自分を隠してはいけないはず。しかし、どんな醜い自分も愛し受け入れられたいと思う反面、愛されなくなる恐怖は、そんな自分を誰にも見せまいとさせる。こうして、自分の欲求を抑圧してでも愛を得ようとすることは、そのまま、ありのままにある自分が愛されることをあきらめる道につながっていく。何という矛盾した姿だろう。その矛盾した自分に気づきつつも、ユキは自らを苦しめてゆく。

<1955年 (日付なし)>

私がもし自殺するとしたら……

1. 人びとにもはやこれ以上私を悪く見せておくことがまんできないから……。このようなみじめな姿しか示せないから。虚栄心とはずかしめら

れたほこり(?)と。

2. 私自身にこのように貧しくみにくく、さかしく自分を見せ続けられないから。高慢。そして第三の回避を忘れていている場合だ。神の前での……そして神の前からは自殺によってさえのがれられないどころか直面することになるのだから。(ユキ18歳)

ユキは、いま自殺をしようとしてこれを書いたのではない。私が自殺するとしたらそこまで私を追いつめるものは何であるか、という意味において書いているのである。この日記は、“愛されたい-愛されない”サイクルの矛盾を見事に表している。

「よい子」を演じることに成功し続ければよい。しかし、いつとはわからないがきっといつか、失敗するときがくる。本当の自分をさらけ出すときがくる。そのとき、愛されないであろう(とユキは思っている)本当の自分を知られて、いよいよまわりから見捨てられることが決定的になる。そのようになることを回避するためには自殺しかない。とすれば、自殺という行為もまた、ユキにとって、虚栄の手段なのだ。ただし、それが「虚栄の手段」でありえるのは、そのような欺瞞が神に対しては通用しないということを、そして、自分自身に対しても通用しないということを忘れているかぎりにおいて、であるけれども。

(6) 束の間の休息

これほどまでに自分の意思や欲求を抑圧するユキにも、愛されるための付加価値を負うことや犠牲を払うことから解放される瞬間があった。それは、皮肉にも、喘息発作が起こったときのことだった。

<1955年(日付なし)>

発作がおこった。生活に追われていたのが、ただ息をつくためにだけじっとしている。賢明である必要もなく、美しくないとの悩みもなく、すべて

から解放されてふたたび私は平安のうちに憩う。私のまちがいは、人びとにとって私を価値あらしめようと駆られていたこと……と思う。神経はすっかり落ちついた。あ、発作のなかでのように神のみ前に生きられたら——私はどんなに幸福だろうか。私自身を忘れて私は平和だろうに。(ユキ18歳)

喘息の発作という、肉体的に追いつめられた状況に置かれたときのみ、ユキはありのままの自分のままでいることができた。そのときだけは自らに犠牲を強いることもなく、自分をよりよく見せることに努めることもなく、ユキは平穏な心でいられたのだ。そこに人びとの愛があったからではない。その状況から考えて、周囲の人びとがユキに対して何らかを要求することから逃れられることを彼女を感じるからである。そして、また、そのとき彼女は「よい子」であれと命令する、彼女自身の内的要請からも自由でいられたからである。「よい子」でいたくないのではない、いまは病気で「よい子」でいられないだけ、だから「よい子」であろうとしなくてもいまは誰に咎められることもない、と。

これは、もちろん、自己に対する抑圧からの真の解放ではない。束の間の休息とも言うべきもので、発作がおさまったときユキは再び愛されるための努力を重ね、“愛されたい-愛されない”サイクルを生き続けるのだ。

そこから抜け出せる方法はただひとつ。自分はあるままで愛し受け入れられているのだということをユキが信じられること。そのためには、母でもいい、他の家族でも誰でもいい、誰かがありのままのユキを無条件に愛し受け入れること、それだけなのだ。

(7) どうしようもない寂しさ

いつも自己主張せず、「よい子」として生きる。しかも、よい子と言われる行為によって目立ってはならない。「よい子」として賞賛されることは、同時に、きょうだいたちにねたまれる原因になりかねない。そうして、愛を得られない不安を抱きながら、ひっそりと目立たぬように、孤独にさい

なまねながら過ごす。“愛されたい-愛されない”サイクルにはいつも孤独がつきまとう。

<1953年5月31日>

十歳になる前から牢獄にいれられてけっしてそこから出ることのないことを知っている一人の若者に、生きること、そのことだけでいいんだ！と説いてみてもどんな感動を与え得るか？ 孤独で無為な毎日、ただあるのは気をまぎらせる短い一生をようやくみたしてどうやら死にまでこぎつかせるものだけ。それが私の人生だ。(ユキ16歳)

固有の意思をもつことを禁じられ、家中の「ごみ捨て場」になり、さらに犠牲を払い続ける日々。そのような毎日に閉じこめられていたユキにとって、今はそうかもしれない、しかしいつかはきっと愛される時がくるといふ希望を、どうしてもつとことができるだろう。ユキはいつもひとりだったのだ。たとえ彼女の周囲に人が満ちあふれようとも、そのなかの誰一人としてユキを固有の意思をもつ存在として迎え入れないというのであれば、どこまでもユキはひとりなのだ。

<1955年(日付なし)>

幼児から今日までずうっといつも一人でおいておかれた私、この狭い自己の中で何が形作られたか？ 感情のままに。奇形児として育ってしまった私、社会的にまったくだめなこの私——だって何の教育、指示、指導も受けなかったのだもの……。確かに私は社会の失格者、常識の欠けた偏屈者——私はいつも一人だったもの！(ユキ18歳)

愛されたいと強く願う反面、というよりは、あまりに強く愛されたいと願ったがゆえに、自分には愛される価値などないのだとあきらめてしまうユキがいる。自分は何の教育も指示も指導も受けなかった、社会の失格者

なのだから、と。ユキは孤独だったのだ。

そんな孤独な毎日のなかにおいて、自分をありのままに愛してくれる誰かがいることを信じながらひとりを耐えるということはできないのだろうか。

精神科医師・斉藤学は、『家族依存症』という著書のなかで、「怒りと悲しみ」について述べている。そのなかに次のような記述がある。「人間にとって孤独は最高の苦痛ですが、それでもある程度はこれに耐えることができます。それは心の中に自分を受け入れ、自分との出会いを楽しみにしてくれる人びとが棲んでいるからです。私たちは彼らと会話しながら『一人を楽しむ』ことさえできます。しかし一次性の恨み〔つまり、人生の早い時期に生じた恨み〕に汚染された人の場合は、こうした愛する存在を心の中に持つことができません。それが彼らに『耐えがたい寂しさ』を強いることになります」と⁸⁾。

自分との出会いを楽しみに思ってくれている誰か、すなわち、ありのままの自分を愛してくれている誰かが必ずいると信じることができれば、いま直面している孤独が絶望的なものになることはない。その「誰か」との出会いを楽しみに、孤独なときを過ごすこともできるのだから。しかし、ありのままの自分を愛された記憶をもつことのなかったユキの場合、その孤独は、「死にまでこぎつかせる」果てしない孤独だったのだ。

<1955年10月31日>

十年のあいだ、私は一つの部屋のなかに閉じこめられていました。(中略) 比較的健康になった今、私はかなり普通の生活をしています。しかし十年の幽閉のあいだに私は病的な多くの傾向を得ました。そしてこの頃それを意識して苦しんでいます。そして私はだれの愛情も信じません。(ユキ19歳)

「誰の愛情も信じない」ということは、自分自身を信じられないということになる。それは、自分が愛されるに値する人間であるという確信をもて

8) 斉藤 学『家族依存症——仕事中毒から過食まで』誠信書房、1989、22-23頁。

ないということなのだ。だから、もしありのままのユキを愛し、受け入れてくれる誰かが現れたとしても、ユキはそれを信じることができない。「愛されたい、愛されたい、どうして私は愛されないのか」というユキの心は「私は愛されない、愛されない運命にあるのだ」という絶望にとって代わられてしまう。そして、愛されない自分を運命として受け入れ、あきらめてしまう。

「もしかして愛される自分なのでは」と思って期待し、失望するよりも、愛されないことを当然のこととしてしまったほうが、自分の不幸を自覚しないでいられるかもしれない。しかし、どうしようもない淋しさにとらわれ続け、信じられる自己をもてないまま、虚ろな時間を生きなくてはならないことに変わりはないのだ。

4. ユキとは誰か

<1957年11月22日>

私は限りなく、とってよいほど、自分のことで人のことで不安をもっていた。そして日記を読み返してみるといかにも強そうな私だ。その私が消えたのだ。人びとの攻撃にさからって苦しみながら、なおその苦しんでいるということで自分でも安らぎがなかった。平和な生活がほしく、家の人と平和に暮らしたく、そして先生に約束したように一人立ちがしたかった。私は抗しきれない家の人たちの攻げき、その上に先生、私はとうとう自分を放り出してしまった。あらゆる不安を。不安のない私に、苦痛のない私になった。不安そのものになった。私はいま日記を読んで、ほんとだ、先生が私を好きだなどと勝手にきめている私は、先生のことなんて考えてみないで、一人よがりの気まま者だ、と。自分がないからなのだ。自分がないからきままだと判断する。(ユキ21歳)

これは、この日の日記の最後の部分である。これを最後に、8歳のときから12年間、営々と書き続けられたユキの日記は終わる。幼いころ本を書

くことが夢だったという彼女の、唯一の作品とも言える長い長い日記。

いったいユキとは誰なのか。

1936年10月、いわゆる日中戦争開始直前の日本に生まれ、戦中から戦後まもない時期に少女期をすごした一女性。10歳少し前に喘息の発作を起し、生涯これに苦しめられる。20歳で分裂病を発病。その病の癒えぬまま、心不全のため、28歳で冥界に旅立つ。

私たちは、この女性を、かつてこの日本の社会に生き、そして死んでいった過去の一女性としてのみ考えてよいのだろうか。ユキとは、いまこの社会に生きている子どもたちのことでもあるのではないだろうか。

ユキは「よい子」だった。誰にも迷惑をかけまいとした。積極的に犠牲を払い、まわりの人たちの愚痴に耳を傾け、自らは「ごみ箱」となり、まわりの人たちの心を浄化することに役立つとした。そうすることによって、彼女は、「よい子」としてまわりから承認された。が、「よい子」としての承認は与えられたけれど、ありのままの自分がまるごと愛されたという実感をもつことはできなかった。だから彼女は「愛されたい！」と強く願った。愛されることを彼女は渴望し、愛をかちとるために「愛されえる存在」になろうとした。だが、そのことによって彼女がかちえたのはあくまでも「よい子」としての承認でしかなく、ありのままの彼女に対する愛ではなかった。こうして、愛をかちとろうとして彼女がたどり着いたのは「決して愛されてはいない」という現実でしかなく、それゆえに彼女は、さらに一層愛されることを渴望しなければならなかった。そうして彼女は出口のない“愛されたい-愛されない”というサイクルのなかで無限循環を繰り返しつつ、自らを破壊し続けなければならなかった。

このような生き方は、しかしながら、ユキの生き方であったと同時に、いまこの社会に生きている多くの子どもたちの生き方でもあるのではないだろうか。言うならば、“ユキ的な”生き方を強いられている子どもたちは、この社会に少なからず存在していると言ってよいのではないか。その意味で、ユキとは、いまこの社会を生きている子どもたちの生き方を先取りの

に生きてしまった女性だったと言ってよいのではないか。

齊藤学は、彼の著書『生きるのが怖い少女たち』のなかで、次のように言っている。「ナバ (NABA 日本アノレキシア・プリミア・アソシエーション) というささやかな組織の会報を『いいかげんに生きよう新聞』という。そこには摂食障害者 (拒食症者と過食症者) たちの声が充満している。その声を、かつて私は『カナリアの歌』と呼んだ。昔、石炭を掘る坑夫は坑道にカナリアの籠を携えたという。酸素欠乏に敏感なこの小鳥は、坑夫の気づく前に酸欠に反応して、とまり木から籠の底へ落下する。私はナバの会報に投稿してくる人びとの声を、時代の酸欠への悲鳴と聞いたのである」と⁹⁾。

カナリアがとまり木から落ちるとき、そこはすでに酸素欠乏の状態にあり、そのままでは、いずれは坑夫自身も酸欠におかされてしまう。カナリアの死は、そのような危機がそれと気づかれぬうちに身近に迫っていることを告知するサインなのだ。摂食障害者たちもそれと同じだ、と齊藤は言うのである。社会そのものが病んでいるとき、誰もがその病にさらされているにもかかわらず、ほとんどの人は何の症状を示すこともなく、「健康者」として暮らしている。そのなかで、特に敏感に反応しているのが摂食障害者たちなのだ、と。その意味で、摂食障害者とは、この社会全体が重大な病に冒されていることを人びとに告知する、カナリアのごとき存在なのだ、と。とすれば、ユキもまた、ひとりの「カナリア」だったと言ってよいのではないか。

自分自身の欲求を抑圧し、まわりの人たちの期待や要求にしたがって生きようとする「よい子」たち。そのような子どもたちはこの社会に少なくない。ユキとは、やがてくるこのような時代を数十年も前に先取りのように生きてしまった女性だったのだ。その意味で、愛されたいがために自己抑圧を強いられる「よい子」の苦悩を書き綴ったユキの日記は、やがてくる時代の苦悩を予告する「カナリアの歌」だったと言ってよいのではないか。

9) 齊藤 学『生きるのが怖い少女たち』光文社、1993、12頁。